



ニッカウヰスキーの品質を鑑定する

広瀬 経一氏(北海道拓殖銀行会長)
1968年8月、72歳執筆

吉田 勝昭
(「私の履歴書」研究者)



吉田 勝昭
(よしだ まさあき)
1942年香川県高松市生まれ
1966年関西学院大学卒、同年日本ケミファ入社、常務取締役、取締役専務を歴任、退任後、一般社団法人中小企業診断協会本部元理事、公益財団法人日本ユースリーダー協会前常務理事、現在は公益財団法人天風会評議員、「私の履歴書」研究会主宰
ホームページ：HOME - 吉田勝昭の「私の履歴書」研究 - 私の履歴書から得られるもの (biz-myhistory.com)

広瀬経一氏の「私の履歴書」を読んだ時、「え?」と思った。なぜなら大蔵官僚が「ニッカウヰスキーの品質を鑑定」できるのかと思ったからです。それを次のように説明されていたので納得がきました。

明治29(1896)年3月7日ー昭和61(1986)年2月18日、香川県生まれ。大正9年(1920)大蔵省入省、昭和17年(1942)神戸税関長を最後に退官。1945年に北海道拓殖銀行副頭取に就任し、1947年には頭取に昇格。1962年3月に会長に就任。頭取就任後に債権整備法に基づき不良債権を切り捨てるための9割減資を強行し、さらにその半年後には100倍強の増資をするという「荒療治」を行い、戦後の拓銀の飛躍を築いた。1952年に第11代札幌商工会議所会頭に就任し、21年間にわたってその任に就いた。

氏は昭和14年(1939)6月8日、札幌税務署長を命ぜられた。在任中にニッカウヰスキーの品質証明問題が起こった。寿屋(現サントリー)を辞めた竹鶴孝氏がスコットランドに似た気候のうえ、ピート(草炭)も豊富な余市にウヰスキー原酒工場づくり5年間貯蔵した第一号ウヰスキーを売り出そうとしていた。昭和15年には

酒の公定価格が決められており、新発売のニッカウヰスキーにも北海道庁の戸塚九一郎長官がマル公決定権を持っていた。

しかしそれには税務監督局鑑定部の品質証明書が必要で、私は鑑定部長の意見に基づき余市の工場を視察したうえ「サントリー」と品質において劣らざるものなり」との証明書を戸塚長官に提出、ニッカはサントリーと同じ一級の価格で売られるようになった。私は別にウヰスキーの通というわけではないが、酒の専門家である鑑定部長を信ずる一方、日本で初めてサントリーの山崎工場をつくった竹鶴さんが、独立して精魂を込めた製品が劣るはずがないと思っただけである。

この品質鑑定証明書がニッカウヰスキー(現アサヒビール)に引き継がれ、現在サントリーのウヰスキーと一緒に世界中から高級の品質評価を受けている。この貢献が氏の誇りでもあるのでしよう。

その後、昭和20年(1945)2月10日、私は拓銀副頭取に就任した。着任当時の拓銀は預金高15億6千万円の拓殖債権銀行で、「割賦貸し付け」という農地を担保にカネを貸す業務が中心だった。しかし不動産金融のほか短期貸し出し、為替、預金な

ど普通銀行業務も兼業していた。金融統制の「県一行主義」で次々と道内金融機関を合併、終戦時には樺太、北海道にまたがる唯一の銀行だった。当時の頭取は七代目の永田昌紳(まさのぶ)氏で東大独法科卒業後ただちに拓銀入りした初めての「生え抜き」頭取でした。

昭和22年4月、永田さんは頭取をやめて相談役に退かれた。とうとう私は頭取を引き受けることとなった。翌23年3月、拓銀は再建整備法に基づき不良債権を切り捨てるため9割減資を強行、資本金を416万2千円にした。さらに半年後には100倍強の増資をして新資本金は5億円となった。

こんな荒療治が効いたのか、拓銀の預金量は減資時の78億円から1年後には202億円、2年度には311億円と飛躍的に伸びた。戦後は大企業の外地支店がなくなつて、代わりに残された唯一の開拓地として北海道に支店を設ける会社が多く、これら大企業の出先は金融逼迫のため地元で資金調達を行った。一方、復興金融公庫が石炭産業振興を重点に北海道へ大量の資金を投入したことも拓銀が大きく伸びた原因であろうか。

この他に、面白いエピソードを「お互いの妹を妻に(お互い義弟に)」で紹介している。

大学3年のとき、すでに私の妹、峯子と結婚していた中学の友人、義弟の徳田源一が京都の下宿へ彼の妹の写真を持ってきた。「どうだ、おれの妹をもらわんか」という。聞けば郷里香川の両家では既に了解済みだったので、暫くして高松市から西一里の鬼無(きなし)にある徳田家で見合いをした。広瀬と徳田家は母親が従妹同士で、昔の結婚は家柄と財産を基準にした家と家との縁結びであったから、本人は否応もない、父親同士の話し合いで結婚が成立、大正9年(1920)1月12日、冬休みで帰省しているとき高松の自宅で結婚式を挙げた。私は23歳、妻志万子は満19歳の誕生日が結婚式だった。

結婚式は父の姉だった伯母夫妻が仲人で、両家のごく内輪の者だけが集まったが、披露宴は親類を始め父の友人、小作人まで三日三晩入れ代わり立ち代わり来て酒を飲んだ。全部父の関係者で私の友人は一人も呼ばれなかった。「こりゃあ、おやじの結婚式みたいだな」と思いながら3日間付き合わされた、と。



「未来の若者へ、明日の北海道へ告ぐ!」

一隅を照らす人になれ!

一人2回連載。

小樽の街中に人の流れを呼び戻したい!

八尾 稔啓
(有エィ・エル・ピー代表)



八尾 稔啓
(やお としひろ)
昭和32年山口県宇部生まれ。
6歳から19歳まで神戸。
小樽商大S56年卒。その後、
グリコで約10年、富山のコン
サル会社で10年。長男の
重度知的障がい。機に独
立。有限会社エィ・エル・ピ
ーを設立27年目、生き生き
生活伝承師を標榜。

コロナ後、毎月北海道に訪道するようになった。毎回、大好きな小樽を必ず訪れてもいる。小樽に向かう列車は、どの列車も満席で空席はほとんど見受けられないような状態だ。

もちろん大きなカバンを手に持つ旅人も多いのだが、最近ではほぼ手ぶらで乗車しているカッパルなども数多い気がする。

大きな流れとしては南小樽で降車、そのまま運河通りに出て堺町筋や運河を見たら、小樽駅へ直行という流れもかなり多い。いわゆる街中を歩き回っている観光客はあまり見受けられない。ここを何とかしたいとずっと以前から思っている。

本来なら人口上昇と言いたいところだが、現状を考えるとかなり厳しい。また、私個人が関与出来る範疇でもない。その、人口動態は以下のような推移となっている。

1920年には道内人口ランキング、一位函館区144万、二位小樽区108万。1950年には、一位札幌313千、二位函館228千、三位小樽178千。2005年一位札幌188万、二位旭川355千。七位小樽142千。2035年では、一位札幌175万、二位旭川26万、10位小樽8万。という流れになっている。小

樽は、もう間もなく10万を切るうとしている。

そこで、以前から議論もされてきた滞在時間の増やし方について今回は絞りたい。

小樽への入込観光客数の推移は以下の通り。H29:806万、H30:781万、R元:699万、R3:266万、R4:407万。ピークほどにはなっていないが、運河通りには人通りが戻って活気があるように見える。

ただ、小樽に宿泊しているのは、上記のうち、道内客が約30%程度。道外客では40%弱しかないのが実情だ。せっかく来てもらっても、半分以上がすぐに札幌に舞い戻る形だ。

さらに滞在時間になると、外国人平均で7・2H。道内人5・2H。道外人で4・6H程度しかない。基本日中歩いて、夕方には札幌へ戻るとい形が主流である。消費金額でいうと、日帰りでは、約1・6万。宿泊すると約3・7万に上昇する。

「小樽」という知名度は、日本でも外国でも、非常にメジャーな地名の一つと言ってもよいだろう。マスコミやSNSなどでも多くの情報が流れている。非常にたくさん歴史の建造物や歴史や文化を感じられ

るものが山積している。SNSではないが、1995年に大ヒットした映画「LOVE LETTER」の影響で、現在朝里駅や銭函駅で降りる外国の旅行者が未だに多いのも驚きでもある。

また、小樽には、「小樽案内人」制度があり、小樽の歴史や観光に詳しい現地人が動をしている方々は、非常に多い。こうした方々がなぜ、大同団結しないのだろう?小樽に住んでいない人間から見ると、なんでもつたいない事だろうと、以前からずっと思っている。

そこで、現在小樽の街中を観光客がもつと自由に歩きやすくするための工夫を出来るような仕組みを考え始めている。例えば、島牧村での実証実験が終わろうとしているもの。地元の観光関係企業などと提携し、地元へ宿泊したらそのポイントに応じて、交通費や宿泊費が無料になるという仕組みを利用する手段だ。

また、小樽の街中ではまだまだWiFiが使いにくい。ネット喫茶もない。コワーキングスペース的なものが街中にはない。されど、商店街は休業している店舗が並びいかにもさびれている。歴史的建造物の看板には、QRコードもついていない。

一方、サンロードの小樽駅側の角にあるローソンの飲食スペースは結構流行っている。旅行者がインスタントラーメンをすすり、携帯の充電をしているさまを見ていると、何かしら歯がゆい思いがしてしまう。

現在、携帯を持ち歩いている旅行客はほほいと言つてもよいだろう。携帯をかざせば、小樽の街歩きの仕方が分かるようなプラットフォームが作れないか?地元の学校(商大や高校など)を巻き込んだクラウドファンディングができるか?

たびたび小樽を訪れて地道に仲間集めを始めている。高齢者の方々も、様々な旅行者との触れ合いが増えた方が、心身の健康増進にもつながると思える。

以前、勢いでつい一人でやってしまったが、クラウドファンディングはある程度の仲間やらないと推進力が不足しないことを実践した。また、基本的に小樽に住んでいる方々が実施の主体で無ければ意味がない。今そのために、小さな種を少しずつばらまいている。

昭和53年度に、小樽商科大学第64代應援團法螺貝(舞・雲龍型)をやっていた経緯もあり、小樽のために「ほら」を吹いて人を集める一助となれば光栄です。